

「とて、グラスを置いたという」
悪筆怪談

雨宮淳司 編著
加藤一 発案



※本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のものです。作中において現代では若干耳慣れない言葉・表記・表現が登場する場合があります。ですが、これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。本文中に、目に余る誤字、誤用、脱字、駄洒落が散見される場合がありますが、これらは作者の意図に基づく演出です。大部分は。

悪筆怪談

カバー写真

悠&よぴー

撮影協力

フローチャート

悪筆怪談

と言つて、グラスを置いたという

目次

6 巻頭鼎談＋1

15 悪筆怪談 開かずの間の地縛霊 雨宮淳司

91 附録 よくある誤字 加藤一

巻頭鼎談 十 1

以前、こんな話をしてました。

雨宮淳司（以下、雨）・・「そう言つて○○さんは、グラスを置いた」を連発する話も考えたんですけどね（笑）

加藤一（以下、加）・・やるなら徹底的に（笑）

雨・・「〜という」も入るだけ入れますかね。

加・・「昔、僕の前の妻の妹の同級生のお兄さんの先生
の隣人の彼女の上司の祖母の従兄弟の叔父の先輩の恩

師の執事の娘の初恋の思い人のかわいがつていた姪の
大切にしていた人形を作った職人の妻の二番目の弟か
ら聞いた話をしよう」と言って、加藤さんはグラスを
飲み干した、という。

雨..なかなか悪文です（悪文自慢）

加..もうそれだけでグラス一杯飲み干しちやつて、「お
姉さん、水割りおかわり！」しかも、なかなか本題に
入らず、なかなかグラスを手放さない、という。

雨..しかも残念怪談なんでしようね(^.^;)

加..水割り五杯くらい飲んだところでろれつが回らな

くなり、席を立とうとすると後ろから羽交い締め、振り向いたところで胸元にマ―ライオン、トイレに籠城され、カギを壊して中に入ると背中に蝙蝠こうもりの翼を生やして薄緑色の作業着を着た鶴ぬえが、窓から飛び立つところだった、という。

雨・・グダグダっすよ (^.^;)

加・・なんというか、アンチテーゼもしくは白戒として「悪筆系ダメな怪談」 オンパレードなものを書きたくなりませんか？

雨・・それって技術レベル高いですよね (^.^;) あと怪談

読んでいてイラツとくるのは何があるかな。

加…イラつとくるのは文章では多いですよ。怪談に限らず。ひとつの文章の中に、同じ表現が何度も出てくるとモニターひっくり返したくなるほどイライラしますが（笑）

雨…あ、やっぱりイラつくんだ(^.^;) ゴシツク体擬音と
いうのは、あんまり連発できないですよねえ。

神沼三平太（以下、神）…ドーンと来てバーンと曲がつて、どんつきの階段を、トントントンと上がつて、という擬音擬態語が極度に多いのは嫌です。

加..でも、関西の人のネイティブな会話を文字に起こすとだいたいそんな感じですよ（笑）

雨..語りだとそっちのほうが臨場感あるんですよ。

神..文章だと苦笑いが出ます。

加..身振り手振りも入りますしね。

加..他に「○○○○すると、ところがそうすると、しかし○○○○なのと、とはいえ○○○○かと思うと……」のように、「と」が続くと、「ととが出た！」と言われたりとか。

雨..それ、やつちやうんですよね。

加…そういうのは「文章が長すぎるんじゃないやあ！　いつ
ぺん切れ！」とか思います。そして文章をデイバイド

するわけです。それと、個人的には「変な」「妙な」「嫌

な」「奇妙な」「不可思議な」という言葉が入る怪談は、

ちよつと苦手です。なぜなら怪談というのはそもそも

が、「変」で「妙」で「嫌」で「奇妙」で「不可思議」

なものなので、如何にそれらの言葉を使わずに、その
違和感を表現するかが重要なので。

雨…それも、やつちやうんですよね(^.^;)

加…意識してないとやつちやいますよね。「という」の

連発もそう。昔、あるベテラン作家の方は「疲れて飽きてくると、ついというを連発しちゃう」と言っていました。筆が乗ってるときは出ないらしいので、ゲラを読んでいるとどこで煮詰まっていたかが分かりました。他には……「幽霊」「地縛霊」「金縛り」は怪談の定番ですけど、定番だけにそのものずばりの固有名詞は使いたくないなあ、というのはありますね。その言葉を使った時点で正体不明の不安感が逆に晴れる気がして。

雨…地縛霊とか守護霊っていう用語のは、結局人には

本当にそういうものなのかは分からないんじゃないか
と思うので使わないことにしています。

加ようろうき・妖弄記やったときに「妖怪に名前が付くと、そこ
で怖い話としては死んだも同然」というのは西浦和也
さんが教えて下さったんですけど、怪談で「幽霊」「地
縛霊」「金縛り」という一種の成語を使うのも、それ
と似た所があると思います。現象が固定されると不安
感が拭われて怖くない。

高田公太・Tさんは「寝てたらピキーンツと金縛りに
遭って、幽霊を見たんだ。多分、地縛霊」と言って、

グラスを置いた。彼は続いて「妙だったよ。不気味だし。異常だったね」と言つて、逆の手に持っていたグラスを置いた。そして「それだけ」と言つて頭に載せていたグラスも置いた、という。

雨・・げらげらげらげら（ツボに入つた）

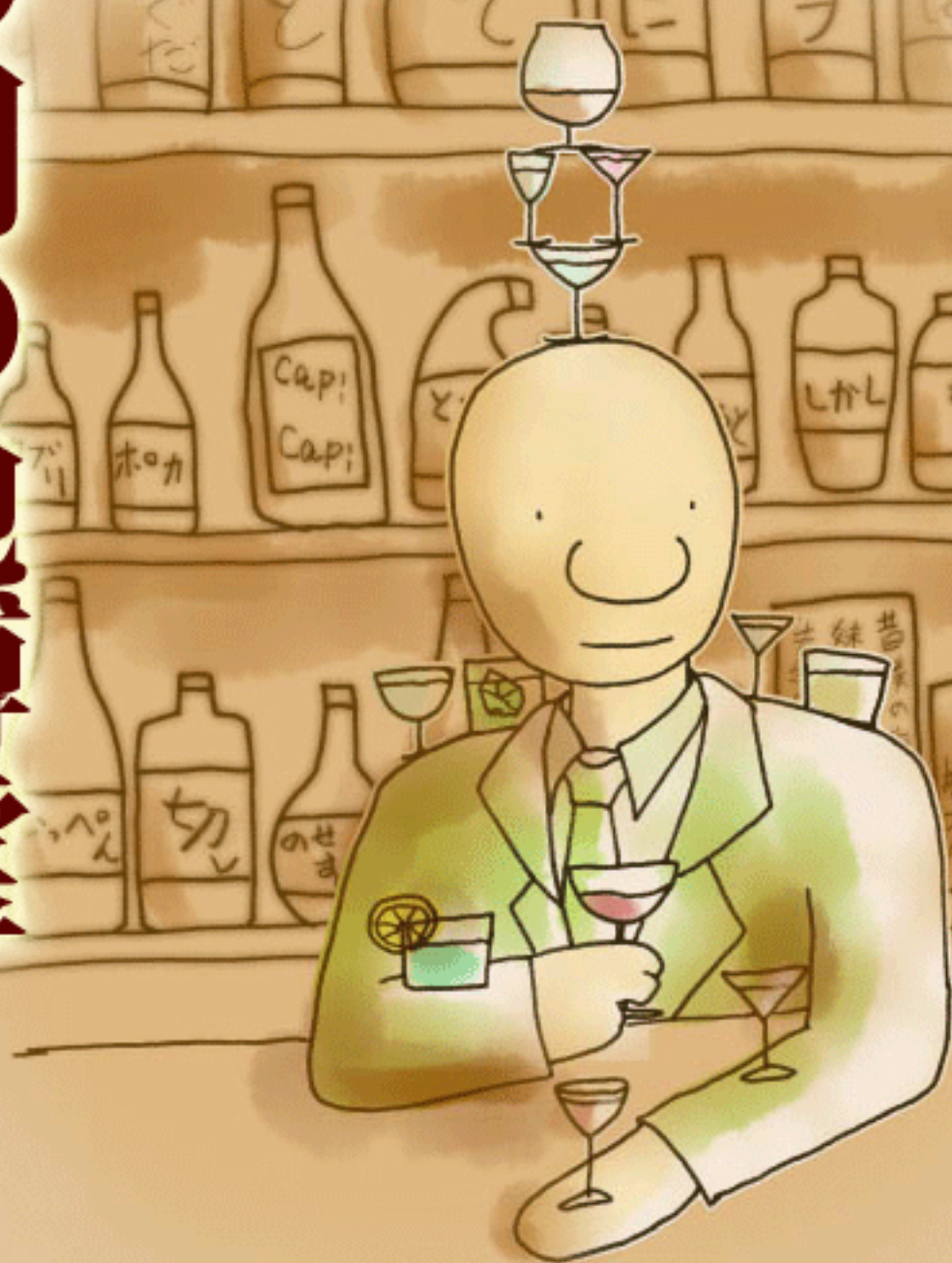
神・・ナイスですねー。殴りますね。僕なら（笑）

加・・グラス載せすぎ（笑）

——そんな話で盛り上がつて暫くしたら、雨宮先生がやらかしたのです。

悪筆怪談

開かずの間の地の縛霊



雨宮淳司

イントロデュース

文章の技巧という奴は、果てしなく難しい。

怪談に限らず、読んでいてイラツとする文章というのはよくお目に掛かるのだが、何でそう感じるのかは、なかなか奥が深いものがある。定番の、やつちやいけないワザをわざわざ繰り出して発作的に書いたのがこれ。

「〜と言って、○○さんはグラスを置いた」

は、怪談のサゲで散々使われてきたので、もうやつちやいけない、という。

第一回

「……あれは、もう十年以前も前のことです」

志下沼さんは、△ワイルドターキーVをドバドバとグラスに注ぎ、そのバーボンの入ったグラスを持ち上げて眺め上げながら言った。

「当時私は、妻の実家に住んでいました。つまり、妻と妻の父と母、妻の兄弟である長男の才蔵、次男の次郎、長女のこずえ、次女のみき、三男の鬼太郎。そして才蔵の妻である貞子と長男の一郎。次郎の妻であるキャロラの妻である貞子と長男の一郎。次郎の妻であるキャロラ

インとその娘のベツキー。執事のゴメスとメイドのベツキー。あと庭師の彦左衛門。運転手の黒川というのもおりましたっけ。これらが同居していたわけです」

「……随分大家族なんですね」

「ええ」

志下沼さんは、そう言ってグラスを置いた。

（……飲まねえのかよ）

志下沼さんは、またグラスを持ち上げると、その香りをヒクヒクと鼻をひくつかせて匂いながら言った。

「当時はこの町一番の立派な館だったのです。……あん

なことが起きるまでは」

志下沼さんは、そう言ってグラスを置いた。

「……ええと、火事が起きたとか」

「あれは酷い火事でした。たぶん、私が夜使ったアイロ
ンが原因だと思いますが、飼い犬のベツキーがワンワン
吼えてくれたおかげで、私は逃げ出すことができました。
凄かったですよ。消防車はジャンジャン来るし、火はゴー
ゴー唸ってねえ。綺麗だったなあ」

志下沼さんは、ハワイルドターキーVをまたドバドバ
とグラスに注いだ。表面張力の限界寸前で止めると、ま

たそれを慎重に捧げ持ち、眺めながら言った。

「可哀想に……ベツキーは、あの火事で死んでしまいましたが」

「……ええと、どのベツキーさんですか？」

「ヨークシャーテリアのベツキーに決まっているじゃありませんか」

グラスのハワイルドターキーVの表面が、ふるふると震える。

「そうなんですか。零れますよ」

「おつといけねえ」

志下沼さんは、そう言ってグラスを置いた。

「……飲まないんですか？」

志下沼さんは、へらつと嗤って

「昼間っから飲めるわけないじゃないですか」

と言って、新しいグラスをバーカウンターから持つてくると、また△ワイルドターキーVをドバドバと注いだ。「……じゃあ、一体何で酒を注いでいるんですか」

志下沼さんは、へらつと嗤^{わら}って、

「僕にもよく分かんのだ」

そう言って、また一人掛けソファに身を沈めて、ちよっ

と前髪を直すと、足を組み、グラスを捧げ持った。

「……ひよつとしたら、呪いかも知れない。あいつの」

「ベツキーのですか？」

「ベツキーじゃない。……いや、メイドのベツキーはブードゥー信者だったが……。そうじゃなくて、開かずの間にいた地縛霊のことだよ」

志下沼さんは、そう言つてグラスを置いた。

「そんな話し、今まで出なかったじゃありませんか」

「だから、今から話すんだよ。あ、その場合『話し』の『し』はいらないから」

第二回

志下沼さんは三つ目のグラスに△ワイルドターキーVを注いで、満足そうに透かし見た。

「この『三つ目』は三杯目の意味で、目が三つあるという意味ではないから」

へらつと嗤う。

「分かっていきます。……そんなことより開かずの間の話をしてくださいよ」

「もちろん」

志下沼さんは、そう言つてグラスを置いた。

が、今度はガウンのポケットから取り出したシガリロを嗅ぎ出した。嗅ぐだけかと思つたら、^{マツチ}燐寸を擦つて火をつけた。

紫煙が棚引く。

「……火事のことだ」

「え？ カジノ跡？」

「……日本に公営カジノはまだないよ。火災のことだ。家庭裁判所の跡のことじゃないぞ」

「……ええ（ちえつ）」

「それまで三十あつた館の部屋が、火事で半分になつてしまつたんだよ。何しろ大家族だから部屋が足りない。だから、それまで使つていなかった部屋にも入らなければならなくなつた」

「なるほど」

「ところが、ひとつい謂われのある部屋があつてね」

志下沼さんは、そう言つてグラスを置いた。

「——あれっ？いつの間にグラスを持っていたんですか？」

「……君が気づかなかつただけだろう。それより『？』」

の後は一マス空けるんじゃないか？」

「ええ（ちえっ）」

「その部屋で、かつて客死した人がいてね」

「客死ですか。『かくし』と読むんですよね」

「『きやくし』でも間違いじゃないんじゃないか？」

「刺客は『しかく』じゃないとカッコつきませんよ」

「……まあ、いい。ともかく死人が出たんだな。妻のひ

いじいさんの時代だから明治の終わり頃の話だ」

「ほう。どんな人なんですか？」

「何でも、民俗学の大家で、妖怪研究家だったんだそうだ」

「病死だったんですか？」

「それが、はつきりせんのだ。どうも……自殺だったのではないかと思われるふしがある」

志下沼さんは、そう言ってグラスを置いた。

「……！（いつの間に）」

「その後、その部屋で寝ていると人の気配がして、白い人影を見たり本の頁をめくる音がするんだという」

「出ましたね『〜という』」

「……何かまずいのかね」

「……いえ、別に」

「ならいいじゃないか。という話があつたわけだよ。爾来、ずっと使われなのまま開かずの間と呼ばれていた」

「で、その客死した方のお名前は？」

「ベッキー浜口という」

「……またベッキーですか」

「不満かね」

「……不満というか……指、焦げてますよ」

「え？ ウワチャチャチャチャチャ！！！」

そう喚いて、志下沼さんはグラスの中にシガリ口を突っ込んだ。

第三回

「で、つまりそのベッキー浜口とかいう人の幽霊が出たわけですよね？」

「そうだよ。……ああ、熱かった」

志下沼さんは、そう言って台無しになったグラスを置いた。

「頁をめくったり、影が見えるほかに何かこう、怪談的にキモになるような怖いエピソードとかはなかったんですか？」

「……それがね。ベツキーが言っていたんだが」

「どのベツキーさんですか？」

「ヨークシャーテリアのベツキーが話すわけ無いじゃないか。キャロラインの娘のベツキーだよ」

「メイドのベツキーかも知れないじゃないですか」

「メイドのベツキーは、リンガラ語とルバ語しか話さないから、誰にも何を言っているのか分からないんだよ」

「……（リンガラ語？）」

「最初、その部屋はベツキーにあてがわれたんだがね。気丈な娘だったから」

「……ええ」

「家具の入れ替えをして、すっかり模様替えをしたら随分小綺麗な部屋になってね。それでお気に入りのパジャマを着て、おニューのベッドに入ったわけだが」

「……ええ」

「……おっと、ここでグラスを用意しなければ」

志下沼さんは突如立ち上がるとバーカウンターへ向かった。

「な、何でですか？」

「だってさ。サゲで『志下沼さんは、そう言つてグラス

を置いた』って、やりたいじゃないか」

「……散々やってきたでしように」

「それとこれとは別物だよ。さあ、準備ができた」

そう言って、志下沼さんはまた一人掛けソファに身を沈めて、ちよつと前髪を直すと、足を組み、グラスを捧げ持った。

「で、ベツキーは何を見たんですか？」

「……それがだ。うつらうつらしていると、枕のすぐ傍を誰かが指で擦るような音がしたそうなんだ」

「……ええ」

私は身を乗り出した。

「はっとして見上げると、薄暗がりの中に……」

「中に？」

「奇怪で、不可解で、不気味で、総毛立ってぞつとする
ような、物凄い地縛霊が立っていたんだそうだ」

「……」

「……どうした？　あまりの怖ろしさに声も出ないか？」

「それじゃあ、さっぱり分からないじゃないですか」

「何が？」

「奇怪で、不可解で、不気味で、総毛立ってぞつとする

ような、物凄い地縛霊って一体具体的にはどういうものなんですか？」

「……分からないことを言うなあ。奇怪で、不可解で、不気味で、総毛立ってぞつとするような、物凄い地縛霊って言えば、誰だってイメージは決まっているだろう」

「……ええと、まあ、それについては百歩譲って一般的な幽霊のイメージだとしましょう。ですが、地縛霊というのはどこから出てくるんですか？」

「じゃあ君は、他の場所に現れず、館の一室に止まっている幽霊を浮遊霊だとしても言うのかね？」

「……」

「だろっ？」

「……ええと、言いたいことは山ほどありますが、それを説明すると長くなるのでもういいです。で、それからどうなっただんですか？」

「ベツキーは怯えてしまつて、部屋を替えてくれと言うんだ」

「まあ、それはそうでしょうね」

「それで、仕方なくベツキーはベツキーと部屋を替えたわけなんだよ」

「……それは人間のベツキーですよね？」

「無論だ。だいいち犬のベツキーは焼け死んでる」

「つまり、ブードゥー信者でリンガラ語とルバ語しか話さない、メイドのベツキーですよね？」

「そうじゃない」

「ええ???」

「私の妻のベツキーだよ。……いい加減、手首が疲れてきた」

志下沼さんは、そう言つてグラスを置いた。

「……あ、まだ終わりじゃないから」

第四回

「いや、それはさすがに」

私は声を荒げた。

「奥さんの名前がベツキーだというのは、後付け設定なんじゃないですか？」

「そんなことはない。伏線を回収したまでのことだよ」

「本当かなあ」

「まあ、何とでも思ったまえ」

志下沼さんは、右手首に指圧を加えながら言った。そ

してまたグラスを持ち上げる。

さすがに苦痛を伴いだしたようだった。ざまあみろ。

「先ほどの私の話では満足できないようだったね。何なら本人から聞いてみるといい」

そう言って志下沼さんは、サイドテーブルの上に置いてあつた真鍮製の呼び鈴を左手で軽く振った。

途端に、天井から真っ黒い影が降ってきた。おどろ線が部屋に渦巻く。

「わっ！」

「驚くことはない。メイドのベツキーだよ。……すまな

いが、ベツキーを呼んできてくれないか」

グワとかグエとか言う発声があつたような、無かつたような……。その黒い影は、私の動体視力の限界を超えた身のこなしで、扉をすり抜けるようにして部屋の外へ消えた。

呆氣にとられていた私がふと気がつくと、右の耳の穴に、いつの間にか何かが詰まっている。指でほじると暗褐色に干涸^{ひか}らびたイモリの尻尾が出てきた。

「おや珍しい。君はベツキーに気に入られたようだね。人見知りする子なんだがね」

「猫じゃあるまいし。……一体何者なんですか？」

「妻が気に入って連れてきたんだが、誰にもその本当の正体は不明だという……」

それ以上聞いても、きつと何の設定もありはしないのだと確信できたので、私は口を閉じてそのままじつと瞑目した。きつと、この先の展開だつて泥縄なのだ。

志下沼さんも間を持て余し、ひたすら鼻の頭を掻いていた。

やがて――。

階段を上ってくる足音が微かに聞こえた。

「……えーと。ここつて二階なんですか？」

「何を言っているんだ。三階の私の書斎だよ」

「初めて知りました」

カタ、コト、カタ。

何となく足音としてはおかしい。

カタ、コト、カタタ、コトントトン。こと。琴。

「……変換ミス？」

カツタタ、カタコトン、カタタタタタ。

ドアが乱暴に開いた。

「ハア〜イ！ 初めまして！ 志下沼ベツキーでござい

まあす！」

「……えー、そういうノリなんだ」

だが、意外なことに志下沼さんの細君は驚くほどの美人だった。豊かに背中に垂らした少しクセのある栗毛。生氣に満ちた愛嬌のある瞳。引き締まった腰のあたり。すらりと伸びた両下肢。黒いワンピースの襟元に覗く可愛鎖骨。なんていい骨だ。

「……何を鼻の下を伸ばしているのかね」

そう言つて、志下沼さんはグラスを置いた。

「まあ、無理もないが。我が妻ながら、ベツキーは美人

だからねえ」

勝ち誇ったように、へらつと嗤う。

猛烈な殺意が湧いたが、深呼吸してそれはうつちやった。

「私にご用だとか？」

にこにこして、ベッキーが言った。

「……ええ、ご実家の開かずの間に出たという幽霊のお話を伺いたくて」

「あーら、そうでしたの。それでしたら最初から私を呼んで下さいましたら、分かりやすく順序立ててちゃんとお話しましたのに。どうせ、うちの主人のことですか

ら肝心の幽霊についても『奇怪で、不可解で、不気味で、総毛立ってぞつとするような、物凄い地縛霊』なんて、幼稚な言い方でしかお伝えできなかつたのではないかしら」

「そ、そうなんです！」

何だか涙が出た。

「おっしやる通りです！」

異国で、初めて言葉が通じたような感動だった。

「……幼稚な言い方とは何だ」小声で志下沼さんが抗議した。

「あなたは黙っていなさい。グラスを上げ下げするしか
能がないくせに」

苦虫を噛み潰したような表情で、志下沼さんはグラス
を初めてぐつと呷あおると、叩きつけるようにテーブルに置
いた。

「……何だこの展開は!？」

第五回

「では、姪のベツキーと部屋を替わったところからお話ししますね」

ベツキーは、ソファに腰を下ろした。

「はい」

私は内ポケットからICレコーダーを取り出して、録音ボタンを押した。

「そんなもの持ってたんだ……」

何だか目の座りだした志下沼さんがぼそりと言った。

「ええ。でも、今まではどうも使う必要性を感じなかったもので」

「ふうん。ああ、そう」

またグラスを呷る。

「……そういうものは、まず電源スイッチを入れないと、起動しないんじゃないか？」

「……いやまあ、それはそうなんですが、お約束と言いますか、そういう描写は微妙に端折られているのが通例……」

「訳知り顔だが『目が座る』じゃなくて『目が据わる』

なんじゃないか。誤字はいかなあ」

へらつと嗤う。この先、とことんこの調子で行く腹づもりらしい。

それでは、只でさえ迷走しているこの話が、いつ終わるのか全く見当もつかなくなってしまう。

私は、全知全能を傾けて志下沼さんを無視することに決めた。

「それは『全身全霊を傾けて』の御用だ！」
「あんたは岡っ引きか！」

——思わず反応してしまった。……私は、こんなノリ

ツツコミ体質に私を生んだ両親をつらつら怨んだ。

「……ええと、姪のベツキーと部屋を替わったところからお話ししますよ」

呆れ果てたようにベツキーが言った。何だか視線が冷ややかだ。その瞳が「おまえら同類だわ」と、あからさまに語っていた。

「ええ、すみません。お願いします」

恥ずかしさのあまり顔を伏せて、私はICレコーダーをテーブルの上に置いた。

「部屋を替わったその晩のことです」

「ええ」

「確か零時過ぎくらいだったと思うわ」

「ええ」

「床板の軋む音がして、ベッドの横に誰かが立っている
気配がしました」

「……ええ。それで？」

「はっとして見上げると、薄暗がりの中に……」

「中に？」

私は身を乗り出した。

「きょうかたびら白い経帷子を着た男が立っていたのです。いえ、立つ

ていたというのか、下半身は闇の中にモヤモヤと消えていました。頭には三角布の頭巾、手甲をつけた両手をだらりと前に垂らして……」

「うらめしや、と言いましたか？」

「……ええ。どうして分かったんですか？」

私は思わず髪を掻き^{むし}毛った。

「……志下沼さん、一杯もらえませんか？」

志下沼さんは頷くと、黙って新しいグラスに酒を注いで手渡してくれた。

ぐつと呷る。火酒が喉を焼いた。

「……で、それからどうなりました？」

何とか気を持ち直して私は言った。

「よく見ると、その経帷子の男は写真で見たことのある、民俗学者のベツキー浜口先生だと気がつきました。先生は顎をしゃくると、こう仰りました。『あそこの床下に一冊の書物がある。処分できなかつたのが唯一の心残りだ』と」

「ほう」

「それだけ言うと、先生はすうーっと移動して壁の中に消えてしまわれました。私があの部屋で幽霊を見たのは、

それ一度きりです」

「ほほう。それはネタに……いや、興味深い事象です。その床下に書物はあつたのですか？」

「メイドのベツキーに床板を剥がさせると、鉛張りの鉄箱に嚴重に封印されたそれが出てきました」

「封印されていた？」

「メイドのベツキーがすぐ箱を壊してしまいましたので、大した意味はなかったようですが」

「どんな本だったのですか？」

「気味が悪いので、ベツキーにあげちゃいましたわ。今

でも彼女の部屋の祭壇に飾つてあると思いますけど」

「……それは見てみたいですわねえ。お願いできますか？」

「たぶん、大丈夫でしょう」

ベツキーは真鍮製の呼び鈴を鳴らした。

一瞬後、ベツキーの傍に黒い影が畏まっていた。

「お呼びでございますか。奥様（リングアラ語）」

「十年前にあなたにあげた本を憶えているでしょう？」

あれを見せてさしあげて」

「——承りました（リングアラ語）」

影が揺らめく。

タン！ 唐突に志下沼さんがグラスを置いた。
「な、何なんですか!？」

「出番を寄越せっ！ 次回は出まくってやる！」

第六回

再び、一陣の風と共に黒い影が部屋を駆け抜けていった。気がついたときには、ベツキーの白い掌に一冊の薄っぺらい小さな本が握られており、志下沼さんがそれを一瞥して不愉快そうにちびりと酒を飲んだ。

「これですわ。箱ごとあげちゃいましたから、まだ中は見たことはありませんの」

「拝見します」

そつと受け取る。一見しただけで分かったが、注意し

ないと頁がバラバラになつてしまいかねないほど痛んでいる。

表紙には題名と著者名が印刷されているようだが、酷く擦れてしまつて判読できない。

○○家○○血○○○書？

それを捲ると、「覚書 ベツキー浜口」とあり、明治後期の日付と共に鉛筆で金釘流の文字が書き込んであった。

現代風に直すところな感じだった。

——私の念願。とうとう。この家で調査。私が。民俗学の中には不明なことが沢山。それは昨今流行している心霊にも。きつと関係。だから、この家を調査。そして、解明。私が。とうとう。とうとう。開かずの間。この日本一の家。本邦最強の幽霊屋敷。凄くラッキー！

「変だ」

私は首を捻った。

「ええ、本当に変なお方だったと伝え聞いています」と、ベッキー。

「変な体言止めの論文ばかり書くので学会を追いつかれたんだそうだ。……もつとも、日本の民俗学が確立したのは昭和に入ってからの話だから、もともと設定が変だけれどな」

と志下沼さん。

「……いや、そうではなくて、これではベツキー浜口さんの死ぬ以前に開かずの間が既に存在していることになっちゃいます」

妙な沈黙が場を支配した。

「それは私も存じ上げません。伝わっているのは、浜口

先生の亡くなつた後の怪異談だけですわ」

「俺もそんな話は聞いたことがない」

と、珍しく普通の間合いで志下沼さんはグラスを置いた。

「まあ、先を読んでみましょう」

私はまた頁を摘むようにして捲つた。

だが、そこには文章は無かつた。

あかいし

朱石家家系図とあり、数頁にわたつて細かく図面が描いてある。

「朱石は私の旧姓。私の家系ですね。……でも、家系図は明治のご一新のドサクサで失われたことになっている

のですが」

「写しがあつたとか。……大元は清和源氏になつていますが、これはよくあること……幕末あたりからがまあ本当かな。本当じゃないと整合性がとれませんからね」

辿つていくと、明治期に入り朱石家のあの屋敷を作つた世代に達した。

戦死、病死という但し書きが急に増える。

「日清日露で結構活躍したんですよ。軍人が多かつたとか」

が、ポツンと〈横死〉と書かれた人物があつた。しか

も朱で上書きしてある。

「朱石光治？」

「これで見ると屋敷を建てた朱石兼利の末の弟ですわね。

……でも、存じ上げないわ」

「さすがに雰囲気を読んで山括弧〈〉を使ったな。＜＞だと縦組みしたら出だし部分みたいになっちやうからな」

志下沼さんが、へらつと嗤った。

「……」

ようやく面白くなってきたところで茶々を入れる志下沼さんが、流石に鬱陶うつとうしくなってきた。どこかに行けば

いいのに。

「どこにも行くもんか」

何であんたは地の文が読めるんだよ！

「早く次の頁を」

俄然興味を覚えたらしくベツキーが急かした。

次の頁からは縦組みの文章が印刷してある。

——朱石光治君のこと

朱石光治君の不遇な人生について、ここに唯一無二の親友として記録を残す。

思えば彼との出会いは奇縁としか言いようがない。○
○高校の学生寮で偶々同室とならなければ、私は彼の時代を遙かに超えたような感性や深い洞察に基づいた豊かな知識について知りようもなかった。

あの少年時代に、そいつた輝くような個性に巡り会えたことは、今にしてみれば胸を灼くほどの喜びである。
目を閉じれば、あの横顔が。白い零れるような歯が。
暖かな、あの掌と艶やかな指先が思い出される。

最初の接吻は

「……あれえ？」

私達二人は首を捻った。

「BLかつ！」

何故か憤然として、志下沼さんはグラスを置いた。

「どーすんだ、この先!？」

第七回

その「朱石光治君のこと」という文章は、「私」と「朱石光治君」との馴れ初めから、肉体関係に至るまでの経緯を興味深く描いていた。

当時の珍しい学生の風俗を交え、堅実だが飽きさせない筆致でそれは淡々と進んでいく。

「……こうして、私たちは一時の愛の巢となつた居室に籠もり、日々お互いを心底まで貪ろうと^{むさぼ}していた。しかし、ある日朱石君の長兄から帝都へ戻るようにという手

紙が舞い込んだ。ふむふむ」

ベツキーが読み上げ続けていた。

「……いや、『ふむふむ』って、実際にはそんな風に独りごちないよな」

例のポーズで志下沼さんが言った。垂れてきた前髪をちよつと直す。

ベツキーが凄い視線を送る。

志下沼さんは、あさつての方向を向いて、チビリと酒を舐めた。

「手紙に書いてあつた子細は不明だが、朱石君の顔色が

青ざめるほどのものであつたからには、一族の重大事であると思はれた。彼はほんの少しの手荷物を持ち、『用を済ませたら、まっしぐらに帰ってくるから』と言い置いて、寮を出て行つた。……だが、それが今生の別れとなろうとは一体誰が予想し得ようか」

「ふーん？　何があつたんでしようねえ？」

「……調べたみたいよ。続きがある。……一ヶ月後、全く音信が途絶えた上、朱石君に関しては『病氣休学』との通達が学校側から出された。しかし、彼の肉体が健康そのものであつたことは誰よりも私が一番よく分かつて

いた。あまりの不審さに、朱石家の当主に面会を願う手紙を出したが、それは拒絶。病名は『朱石家の為と慮りおもんばか候事平に願い』『市井では口に出すことも憚はばかる類』という文面が続くばかりであつた。私は、業を煮やし、朱石家の門を叩き面会を乞うた。が、書生数名に袋叩きにされ、腕を折られ放逐された。鬼哭啾々、私は退学の憂き目をおい、正業に就けず、放浪するよりなかつた」

「……おいおい」

「数年後、ある木賃宿で朱石家の補修を請け負つたという職人と出会つた。刃傷沙汰も辞さない覚悟で問い詰め

ると、座敷牢の解体工事だという。そして、この翌日の新聞に朱石光治君の小さな訃報が載っていた」

「ええ？」

「活字職人である私は、かねてより朱石光治君という存在を世から抹消しようという何者かの意図を挫くために朱石家の家系図を秘匿し、これを印刷できるように用意していた。今回その後半にこの手記を追加し、小冊子とすることにした。私は、例の職人に有り金を渡し、朱石家の床下にこれを隠すよう頼んだ」

「……」

「理由は不明なれど、朱石君を幽閉の上横死させ、我が人生を狂わせたあの家を呪わずにおられるものか。病魔に侵されし我が生、残り僅かなり。我、大怨霊となりて、子々孫々に至るまで朱石家を祟り尽くさん。——うわつ、血で呪符が書いてある！」

「うーむ。ベツキー浜口氏が訪れているからには、その後その怨霊が出たんだろうな。それで開かずの間になって、それが、後に伝わったと」

志下沼さんが言った。おそらく、その通りなのだろう。信じられないようなシリアスな展開に、私は戸惑って

いた。

ダメ怪談じゃなかったのか？　これじゃあ、普通の怪

談だ。何だか……。

……怖いじゃないか。

「……いや、怖くないですよ」

突然、耳元で若い男の声がした。

「ななな、何だ？」

ソファから転げ落ちるようにして見上げると、木綿の紋付きの羽織に小倉袴という、明治期の書生風の格好をした若い男がにこにこして立っていた。

「こんにちは。朱石光治です。はじめまして」

「ええええ？」

「正確には朱石光治の幽霊です」

「何てこった」

志下沼さんが、機械人形のような所作で、酒をグビリとやって、スタンとグラスをテーブルの上に置いた。

「うっわー」

とベツキーが嬌声を上げた。

「すっごい美青年！」

「でしょっ？」

華麗に朱石光治が髪を掻き上げた。特殊効果の光点が背景を覆った。

「僕が言っちゃっていいのかな？ 次回、最終回。ほれほれ肩出しサービス、サービスう！」

グラスが割れそうな勢いで、志下沼さんがテーブルにそれを叩きつけた。

「俺の出番をとるんじゃないねえ！ オホン、……次回、最終回だよん」

「うわー、グダグダだあ！」

私は耐えきれずに叫んだ。

第八回

（第一部最終回）

「……えー、それでは最終回を始めたいと思います」

私は憂鬱^{ゆううつ}に口火を切った。どうせ、收拾がつかないグダグダ状態で終わるに決まっているが、これは語り手の責務なので仕方がない。

「しかしまあ、出てきたばっかりで最終回というのも、なんだかなあ」

朱石光治の幽霊が、空いているソファに座りながら宙を見てぼやいた。

「出て来なければいいんだ」

志下沼さんが毒づいた。グラスを持ち上げて、そしてはっと気づいたような表情で言った。

「そういえば、このグラスを上げ下げする動作は君の呪いか何かなのか？ 結婚以来ずっとやっているのだが」

「それは、僕じゃないですね」

「では、あなたの恋人の？」

ベッキーが言った。

「どうせなら雑巾掛けの動作か何かに変えてくださると大変ありがたいんですけど」

志下沼さんは咄然とした。いい表情だ。

「多分そうなんでしょうけど、彼とは話が出来ないのですよ。どうしても通じないんです」

「ほう。やはり霊の間には何か波長とかそういう、テレパシーみたいな通信手段があるのですか？」

私はつい興味を持って訊いた。

「いえ、携帯を解約したみたいで」

「……携帯って。あの世にも電話会社があるんですか？」

「ありますよ」

「……あるのかよ。」

「大体、話の筋から言つて、すべての原因は君にあるよ
うだが、東京の屋敷に帰ってから何があつたのだね？」

志下沼さんが、珍しく話の流れを修正した。

「それが……実は、帰り着いたのが嵐の日でして」

「ええ」

「玄関で転んでしまいました」

「ええ」

「それ以来、記憶がないのです。どうやら頭を打つて人
事不省になつたあげく、何かに取り憑かれたようです。
それで、酷く暴れ回るものだから、ずっとあの部屋に閉

じ込められていたようです。で、まあ、そのまま衰弱してその後死んだようです」

実にあっさりとした素晴らしい要約だった。

「取り憑いた何かって……何？」

ベツキーが言った。

「分かりませんが、魔物……ですかね。憑依されていた間、どうも外国語を喋っていたようです」

「……（リンガラ語だ）」

「……（リンガラ語だ）」

「……（リンガラ語だ）」

私たち三人は同時に思った。だが、天井付近にほくそ笑む黒い気配を感じたので、さらつとこの件は流すことにした。

「……で、死後はどうだったんですか？　ずっと例の開かずの間に？」

「いえいえ、霊界管理事務所の紹介で、あちらの教育機関に通わせていただきました。その後、中堅の出版社に就職して現在編集の仕事をさせていただいています」

「……えーと。……編集ですか？」

「ええ。BL本ですねー。売れ筋ですよ」

「えーと、そうじゃなくて……あの世つて、そんなもんなんですか？」

「幽霊が言っているのだから、間違いないですよ。……ここだけの話、今の政権が経済オンチでして、出版不況が長引いてましてね。いろいろどこそこが危ないとか噂が出てます。大手も例外じゃないですね」

「……」

「あー」

ベッキーが言った。

「容姿が大変お美しいのですけど、多分お亡くなりになっ

たときの年齢と合わないのではないかと思うのですが。
やはり、霊界では若返るのでしうか？」

「ふふ」

朱石光治の幽霊は笑って言った。

「アンチエイジングと美容整形ですよ。僕の唯一の趣味です」

「……そうになると、年をとって死んだ場合どうなるの
で？」

「ヨボヨボですねー」

「呆けてたら？」

「呆け呆けですねー」

「介護は？」

「いや、もう死なないし」

「……」

死後の世界の、恐るべき真実に我々が打ちのめされて
いると、朱石光治の幽霊は時計を見て言った。

「そろそろ、ツアーの集合地点に行かなければなりません」

「ツアー？」

「最近、こちらへの渡航手続きが緩和されたので、里帰

りツアーが人気なんですよ。今回はそのついでにお邪魔したというわけで。それでは、失礼します」

朱石光治の幽霊は立ち上がると、冷笑めいた表情で我々を一瞥し、じわりと空間に滲むようにして消えていった。

気まずい沈黙が部屋に立ちこめた。

随分と酔いの回ってきたらしい志下沼さんが、ぐちぐちとつぶやき始めた。

「……だいたい、この怪談は誤字とか悪筆な文章をテーマにして始めたはずだったよなあ」

「ええ、まあそうです」

私は仕方なく応じた。

「俺が頑張つてせっかくシユールでオフビートな雰囲気
を醸し出してやっていたのに、どこで間違つたのかなあ」

「……何だか、私に責があるような言い方ですね」

私はむっとして答えた。

「語り手なんだから、それはないとは言えないだろう。
もつとうまく舵取りをすべきだったんじゃないのかね」

「……その舵取りをすべてぶっ壊してきたのは誰なん
ですかね」

「まあまあ、これで終わりなんですから」

ベツキーが立ち上がって新しいグラスを三個用意した。それぞれに同じ分量を注ぎ入れる。

「乾杯して、皆同時にテーブルにグラスを置いて終わりにしましょう」

「……お前は早く終わりにしたいらしいねえ」

「当たり前じゃないの。やってられないわよ。あなたの妻役なんて」

「……それ、あんまりじゃないか？」

意外にも志下沼さんの目に涙が滲んだ。

「こんなに愛しているのに」

「はいはい。じゃ乾杯しましょうね。これ持ちなさいって」
ベッキーが無理矢理、私と志下沼さんの手にグラスを握らせた。

「では、かんぱーい！」

皆、条件反射的にグラスを煽る。

そして、次の瞬間、三人の空いた手がそれぞれのグラスを持った手を掴んでいた。

「なにやってんの！」

「置かせるものか！」

「語り手の責務として、ここはひとつ私に！」

「グラスといえは志下沼さんだろうがよ！　だいたい、語り手さんよ、お前一体誰なんだよ！」

え？

……そういえば、私って一体誰なんだろう？

レゾンデートルを一撃されて隙が出来た。志下沼さんの腕がすり抜けてしまった。

だが、そのグラスがテーブルに置かれる寸前、ベツキーの掌がその底に滑り込んだ。

「最後くらい、あたしに譲りなさいよ。愛してるんで

しよ！」

「……それとこれとは別だ！」

グラスを置くことに異常な執念を燃やす志下沼さんは、ベッキーの体を耒り取るように引きはがすとソファのほうへ押し倒した。

「はははははは！ ついにこの時が来た！」

勝利を確信した志下沼さんが、魔王さながらに哄笑した。味わうように、じつくりとグラスをテーブルに近づける。

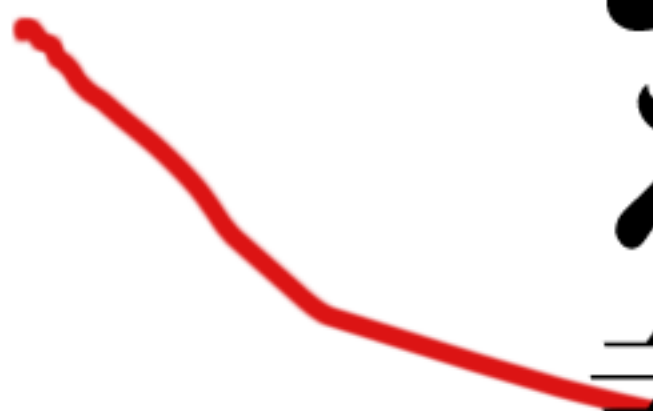
あとほんの僅か……、だがその時！

作者は書くのをやめて、ゆっくりとグラスを置いた、

という。

附録 よくある語字

語字



加藤

●よくある誤字。「食事の支度、身支度」は、「**整える**」ではなくて「**調える**」。

●よくある誤字。人間が食べるのは「**食事**」。動物に餌として与えるのは「**食餌**」。

●よくある誤字。様子は「**窺う**」。機嫌はおうかがいを立てるなら「**伺う**」。機嫌でも様子を観察するなら「**窺う**」。相手宅を訪問するときは「**伺う**」。

●よくある誤字。say、said は「**と言った**」。文末に付いて様子を伝える場合は「**と謂う**」だけど、一般的には転じて「**といつ**」と開く。

●よくある誤字。大まかな場所を示す場合は「**辺り**」。命中するのは「**当たり**」。でも、許容範囲だったり、慣用だったりで、当たりと辺りと中りって混用が進んでる気はする。

●よくある誤字。「**聞こえる**」のは受動的な場合、音楽・話など積極的に聞き取る場合は「**聴く**」、相手に回答を促して話をたずねるときは「**訊く**」（訊問）。

●確率と確立もよくあるまちがいだけど、厄介なのは「**持つ**」と「**保つ**」のように意味が微妙に近かったりする同音異義語や、同音類義語。

●**堅い**、**硬い**、**固い**は、それぞれ対象となる物質の形状や硬度が違うもの、或いは物質じゃないものの硬軟を示すのに使い分けないといけないんだけど、長年やってて未だに混乱するし。

●よくある誤字。「○未だに／×今だに」。これは何となく「**今でも**」「**今もなお**」との語意の混用で「**今だに**」が正しそうな気持ちになっちゃうけど、「今以てそうなつていない」という意。「**今以て**」だけど、やっぱり「**未だ**」に。

●よくある誤字。「○変わる／×変る」「○触る／×触わ

る」送りがなの間違いだが、これらはA T O Kだと普通に交換してもまず出ない。M S - I M Eは使わないのでわからんのだけど、この変換をする人はたまにいます。I M Eの問題なのか、意図した誤変換なのか不思議。

●あ、これはあまり見ない間違いだけど、確かに混乱しそう。「自分の考え、いつも主張している意見」は、「**自論**」**○持論**」。確かに自論でも意味が通じそうではあるけど、「**自論**」は間違い。

●悩ましいのは、「ズボンのファスナーを開く（下ろす）」のは**開放**だけど、「パンツを脱がして中身を出す」のは

戒めから解き放っているの**「解放」**になる、という点。
BLの編集さん、校正さんは原稿読みながらぶつぶつ呟いて悩んでいると思う。

●そしてこれまた混乱するのが、**「痕」**と**「跡」**。傷痕や身体に付く外傷などについては**「痕」**、銃弾が着弾した**「痕」**。負傷を連想させるものには病ダレの**「痕」**を使い、遺跡、逃亡者を追いかけるときは**「跡」**を追う。でも、**「痕跡」**なんて言葉もあるので、これまたどっちでいいのか悩む。

●そういえば、僕が小学生の頃は**「行っ」**って、「な送り」っ

て言つて「**行なう**」でもOKだった気がするんだけど、あれは気のせいなのか、な送りは消滅したのか、最近のA T O Kでは最初から変換候補に「な送り」は出ないな。今では本則とは違うらしい。

●よくある誤字。乾燥するのは「**乾く**」。でも、冷たいモノが欲しくなるのは「喉が**渴く**」。「**喉が乾く**」は間違い。「**渴く**」は渴望とか潤い不足を意味するので、「なんだよ、ここはビチャビチャじゃないか」の逆の状態のときは、「**乾いて**」いるのではなく「**渴いて**」いて、でもビチャビチャにしているけど満たされないときも精神的

には「**渴く**」。ああ、日本語って難しい。

●悩むのは「**上る**」「**登る**」と「**上る**」「**上がる**」が混在する文章。ちなみに山は「**登る**」。階段は「**上る**」。

●よくある誤字。使い分けが難しい編。「**ところ**」と「**所**」の使い分け。「○○○○した**ところ**」「**ところ**で」「**ところ**が」はひらがな。「まっすぐ行つた**所**の」など場所・地帯を示す語は漢字。

●よくある誤字。使い分けが難しい編。機械・乗り物は「**停める**、**停まる**」。でも車を降りる場合は「**駐める**」。動きのある小さなものは「**止まる**」。「**止める**」と書いたら「**や**

める」なのか「とめる」なのかわかりにくくてまた悩む。

●よくある誤字。見分けにくい編。「話し始めた」は、(し)が付かないと間違い。「話を始めた」は、(し)が付くと間違い。

●よくある誤字。どっちも正解編。馬鹿と莫迦とバカはどれを使っても間違いじゃない。そして文芸派の人は「莫迦」を使いたがるが、莫迦は当て字。

●よくある誤字。見分けにくい編。「光」は、名詞なら(り)は付かないのが正解。「光り」が、情景描写を企図しているなら、(り)が付くのが正解。「光の玉」は正解

だが、「**光りの玉**」は不正解。

●誤字じゃないけど、「ふいに気付いた」の、「**ふいに**」は、「**不意に**」が正則。

●よくある誤字。「**殆ど**」は送りに（ん）が入らない。「**殆んど**」だと「**ほとんど**」になるので間違い。「**変る**」と並んでよく見かける謎の誤変換。こちらにも正しくは「**変わる**」

●よくある誤字。誤字じゃないけど……編。「**目**」は人間の目。「**眼**」は人間以外、ケモノ、昆虫、人間と断定できない何かの眼。「**足**」は人間の足。「**脚**」は人間以外、

ケモノ、昆虫、椅子とテーブルの脚。でも、どちらを使つても厳密には間違いとも言えない。医学用語・学術用語としての正確さではないところで、一般的な表現でわかりやすさを求めるなら、「足の親指、足の小指」にはなると思います。でも、「足の人差し指」で人を指さす人はいないような。

●よくある誤字。「辞める」のは職を辞す、趣味を諦める場合。「止める」のは行為を中止する場合。でも、「止める」と「止める」は、漢字送り表記するとわかりにくいので、「止める」はひらがなに開きたい。

●よくある誤字。間違いじゃあないんだけど……方向指示。「**指差す**」「**指さす**」、指が付くときは「**差す**」か「**さす**」。指が付かないときは「**指す**^さ」。「**挿す**」と書いたら穴につっこむ。「**刺す**」と書いたら尖ったものを柔らかいものに突き入れる。

●どっちでもいい言葉、どっちでも間違いじゃないという言葉がなぜ修正されるのかと言うと、同一刊に乗るその他大勢の共著者、同一出版社のその他の既刊などとの整合性、統一性の確保のため。他多数と揃ってないと、読者は読みづらい。

●よくある誤字。「**労う**」は、「**ねぎらう**」。「**労る**」は、「**いたわる**」。「**劳らう**」は、間違い。「**劳わる**」も、間違い。

●よくある誤字。静止画のプリントされた写真には「**写る**」。映像・動画、モニターには「**映る**」。デジカメで撮影した画像がプリントされたら「**写る**」。パソコンのモニターで確認しているなら「**映る**」。

●よくある誤字。「**を貰う**」（受け取る、受領する）は漢字。「**く**して**もらう**」など、相手が何かを代わりにしてくれるなどでは、平仮名。用法として厳密には許容範囲内だが、読みやすさを優先して、受領の意を伴わないも

のは平仮名送りにする。

●あ、そうそう。前から気になってたんだけど、約物で

<>は◇（山括弧）にして下さいよ。

<>は数式記号（小なり・大なり）なので縦組みするとそのまま横向きに寝ちゃうので、必ず全角◇でお願いします。半角の^vもダメです。



フローチャート

中野の隠れ家 なごやんダイニングバー

J R 中野駅 北口 徒歩 6 分

西武新宿線新井薬師駅 南口 徒歩 10 分

〒 165-0026

東京都中野区新井 1-14-1 シェ・ユミ B1

Tel.03-5942-7570

営業時間 19:00 ~ 5:00



もっと 読みたいですか？

竹の子書房文庫は、読者の皆様のご意見・ご感想を糧に、日々ニョキニョキと成長します。もっと読みたい、続きを読みたい、もうやらんでいい、などなど、ご意見ご感想などありましたら、

<http://tknk.wwu.jp/?p=616>

こちらのページまでご感想をお寄せ下さい。また、

【竹の子書房】 悪筆怪談 #tknk

に、ご感想を一言添えて ReTweet してくださいませ。RT がたくさん付くようでしたら、大慌てで続きを書きます。

竹の子書房の前身である筍書房は、昭和二十年、終戦直後の東京に創立した。空襲により焼け野原となった国土を前に、我々は何故負けたのかを自問自答した創業者・竹野正法は、そこに彼我の文化の差を痛感したという。当時の日本は学童の就学にも事欠く有様であったが、良い図書を広く頒布せしめることで日本の教育水準を一層高めると同時に、知を愉しむ、娯楽としての読書の価値を広めるべく、古今東西のあらゆる娯楽を書籍化することを決心した。当初、一刻も早い国土の再興を願った竹野正法は、自らの姓から一字取り「竹書房」と名付けることを考えた。しかし、創立当時、空襲で焼け残った土に半ば埋もれたあばらや住まいであった竹野は己の分を弁え、敢えて「未だ土の中」として筍書房と名付けた。竹野正法は、焦土の中から拾い集めてきた焼け板に、燃え落ちた家屋の墨を溶いて「筍書房」と墨書した。焦土の苦しみ忘れまいぞと誓うこの看板は、平成頃まで長く筍書房の誇りと誓いを現すものとして本社正面玄関に掲げられてきた。その後、竹野正法の願いは須く実現された。昭和二十七年、サンフランシスコ平和条約の発効により自由を取り戻し、続く朝鮮戦争特需で奇跡の復興を成し遂げた日本にあつて、筍書房は広く教育と娯楽を提供するべく粉骨砕身し、筍書房はウィットとペーソスを身につけた教養人の育成に努めた。

平成の初め、日本は空前のバブル景気に沸いた。筍書房は経営の拡大を目指して不動産経営など多角経営に乗り出していたが、バブル崩壊と同時に経営が悪化。会社更生法適用が視野に入る、会社存続の危機に見舞われていた。創業者・竹野正法は、失意の中、会社存続を願って世を去った。この筍書房の空前の危機を救ったのが、後に社長職を継ぐ竹野美恵である。既に萌芽はあったものの、男社会であった出版界ではその内容に眉を顰める者も多く日陰に甘んじてきた「やおい」に着目した竹野美恵は、女性読者の獲得を狙ってこの分野を表舞台に引き上げた。竹野美恵の狙いは的中し、日陰で腐り果てていた日本全国の腐女子、貴腐人の心を掴むことに成功した。筍書房社内ではこれを「美恵流」と称して讃え、後の「BL」の語源ともなった、とされている。筍書房は美恵流の成功により息を吹き返し、娯楽出版社として甦った。竹野美恵はさらに改革を推し進めた。旧来の筍書房という社名では如何にも厳ついイメージが強く、美恵流に馴染んだ若い読者に近寄りがたいイメージを与えてしまう。そこで、CI戦略に則り、社章と社名の刷新が進められた。社のシンボルマークである竹の子印はこのときに社章として選ばれた。竹の子印はその後、数代に亘って修正が加えられ、平成二十二年に現在の形となった。社名については「筍」の文字を読めないゆとり世代の若年層にも読める文字という配慮から、音を同じくしつつ「竹の子」とした。昭和二十年の創立から六十五年をして、ここに現在の「竹の子書房」の名称が定着した。

竹の子書房はその後躍進を続け、電子書籍事業に進出、特化を果たした。しかし、創立時の竹野翁の気高い志を忘れることなく、竹野美恵の柔軟さを蔑ろにすることなく、なお一層の進展と社会への貢献を続けていくべく、ここに誓いを新たにしたい。



悪筆怪談

と言って、グラスを置いたという

2010年11月21日 初版発行

2011年4月26日 改訂第三版発行

編著 雨宮淳司 @J_AMEMIYA

協力 加藤一／神沼三平太／高田公太

<http://bit.ly/acKJ9q>

企画発案 加藤一 @azukiglg

監修 加藤一 @azukiglg

カバー写真 悠&よぴー @yuuandyoppy

撮影協力 フローチャート

挿画 ひょーじ／嘉弓莉悠介

装幀 田中真美 @tanakandesu

発行人 加藤一 @azukiglg

発行所 竹の子書房 @takenoko_shobo

<http://www.takenokoshobo.com/>

製版所 GLG 補完機構